ある女の哲学

ある日　女は考えた
命の不思議と儚さを
兎に死なれて考えた
柩に入れる詩を書いて
女は静かに泣いていた
『生きる』というのは
窮めれば
別れと
　別れと
　　別れと
　　別れ

ある日　女は考えた
心に形はないけれど
心の器はあるのだと
お茶を飲み飲み考えて
女は静かに頷いた
『生きる』というのは
窮めれば
思いと
　思いと
　　思いと
　　思い

ある日　女は考えた
私の命は太古から
私のものだと考えた
答えを闇に葬って

女は静かに目を閉じた
『生きる』というのは
窮めれば
光と
　光と
　　光と
　　光